

# き ぼ う

青少年育成広報

第34号  
 発行人  
 青少年育成那珂市民会議  
 会長 関 守



奥久慈憩いの森 (R 3. 8. 3)

ふるさと教室 第2回教室「木製プランター作りにチャレンジ！」

## 夢の実現

青遙学園那珂市立横堀小学校六年 篠崎 未悠  
 私は、将来「イラストレーター」になりたいという夢があります。この夢をもつ理由は、幼いときから絵を描くのが大好きだからです。そこで、自分の夢を実現させる方法について調べてみました。そこには、「一人前になるためには、いくつもの壁を乗り越えなければならぬこと」が書かれていました。

夢の実現のために、今自分ができることを一つ一つ積み重ね、失敗を恐れず、何事にも前向きに取り組んでいきます。そして、世界中の人に感動を与えられるような「イラストレーター」になりたいです。

## 私の思いを漢字にする

緑桜学園那珂市立第三中学校七年 上野 心葉  
 去年の私を漢字で表すと「新」です。なぜなら、去年は中学生になり、部活動や体育祭、※芝苑祭といったたくさんの方の新しいことがあったり、新しい友人に出会えたりしたからです。

今年の目標を漢字で表すと「挑」です。この漢字には挑戦・挑むなどの意味があり、私は部活動や勉強に真剣に挑みたいと思いい「挑」にしました。

全てのことに真剣に挑み、それぞれの目標を達成できるように努力していきたいです。

※芝苑祭：第三中学校の文化祭

## 青少年健全育成のまち宣言

- 1 市民の英知を結集し、みんなで積極的に青少年を育成しよう。
- 2 よい環境をつくり、心豊かでたくましい青少年を育成しよう。
- 3 自立の心を養い、連帯性や社会性に富む青少年を育成しよう。



**「親が変われば、子どもも変わる」運動**  
**那珂市推進大会**

令和3年10月30日(土)  
 於 市総合センターらぼーる

この大会は、時代を担う青少年が、心身共に健康で人間性豊かに成長することを願い、保・幼・小・中・高、各世代の子をもつ保護者による子育て体験発表と、子育てに関する講演を毎年開催しています。

今年度は、コロナ禍のため講演会は行わず、ひまわり幼稚園・青遙学園内の小中学校の保護者代表による体験発表のみを行いました。ここに「子育て体験文」を掲載しますので、皆様の子育てや、より明るい家庭づくりのための参考にしていただければ幸いです。

**「当たり前を大切に」**

ひまわり幼稚園 保護者  
 小澤 卓也

らったら「ありがとう。」幼稚園児にも分かる、あまりに当たり前のことですが、この「当たり前」が人として一番大事であり、大人になっても幾つになっても変わらないのだと思います。

私には四人の子どもがいますが、これぞ「私の子育て論！」的なすばらしいものは何も持ち合わせていません。なので、今回のお話をいただき正直何を書くか困りましたが、子どもたちに対しての思い等を書かせていただきます。とにかく子どもたちには普通に育ってほしいと思います。普通とって人も人によって基準は様々だし、その普通が子育てにおいて一番難しいのかもしれない。また、子育ての答えはいつ結果が出るのか、誰が答え合わせしてくれるのかもわからないものです。ただ、私は4人みんなが、ありがとうとごめんなさいを言える普通の子になつてほしいと思っています。悪いことをしたら「ごめんなさい。」人に物を頂いたり、何かをしても

本当は、勉強でもスポーツでもできるに越したことはないですし、がんばってくれたらと思います。が、「当たり前」この一点以外は子どもたちの自主性に任せています。なぜなら子どもの視点や考え方は新鮮で時に、大人より素晴らしいと感じることがあるからです。コロナ禍において家で子どもたちと過ごすことが増えた中こんなことがありました。夏休みも終わり、学校再開するはずが緊急事態宣言発令によりリモートでの授業となりました。タブレットの設定など補助のため授業の様子を見てみると、小学生の息子は第一声「久しぶりにみんなの笑顔が見られた！」とうれしそうに言ったのです。考えてみればもう一年以上マスク生活、給食のときも前を向いたまま黙食。友達の顔をしっかりと見ることがで

きていなかったのだと気付かさ  
れました。初めてのリモート授業、  
いろいろと努力してくださった先  
生方や親である私は、ちゃんと接  
続できているか、うまく授業は進  
むのかなど不安の方が大きかった  
のに対し、息子は純粋な視点でリ  
モートでの感動とメリットを瞬時  
に見出したのです。

また、幼稚園生の息子とテレビ  
を見てみると、「テレビに出ている  
人たちはマスクを付けていないけ  
ど大丈夫なの？マスクなしでいい  
なあ。」と。当然、大人の私たちは  
テレビ業界では感染対策を徹底し  
ていることやアクリル板等の意味  
を認識して普通に視聴しています  
が、5歳児ながらにテレビ画面を  
通してコロナに対する恐怖や、早  
く以前の生活に戻りたいという思  
いを受けているのだなど、考えさ  
せられる一言でした。

このように、何気ない生活の一面  
から子どもだからこそその良い発想  
に出会い、大人の考えを押し付け  
ることにより子どもの自由な発想  
や思考を押しやっつけてしまうこと

もあるのだなと教えられています。

「当たり前」ができていれば、そ  
れ以外の大抵のことは子どもたち  
自身で考え、成長していつてくれ  
ているような気がします。そのた  
め普段、私が声を荒げて怒ること  
も殆どありません。とは言え、男  
親の私よりも母親である妻の方が  
圧倒的に子どもたちに関わる時間  
も多く、「当たり前」以外の部分は  
任せてしまっているのかもしれない  
ですが……。妻とは自然と役割  
分担をし、子どもたちの毎日の変  
化や成長を見守り、楽しみながら  
限られた子育ての時間を過ごせて  
います。

子どもがやりたいことは極力や  
りたいようにやらせ、当たり前が  
出来ていないときはしつかり叱る。  
当たり前以外の部分は、すぐ叱る  
のではなく優しく見守り、子ども  
だけで行き詰まってしまった時に  
は手を差し伸べる。

これが、私が今まで何気なくやっ  
てきた子育てであり結果的に私の  
「子育て論」になるのかもしれない。



## 「ほめる」

青遙学園 那珂市立横堀小学校 保護者

沖山 亜紀

私には、小学六年生の娘がいま  
す。活発とは言い難いですが、自  
分から企画を立てて友達を誘って  
遊ぶことが好きな子です。最近ほ  
おしゃれにも目覚め始め、毎朝準  
備に大変です。

今回「親が変われば、子どもも  
変わる」というテーマを頂いた時  
に、何があるだろうと考えました。  
あまり特筆して言えることはあり  
ませんが、我が家では、娘が頑張っ  
たことに関してまず「ほめる」と  
いうことを大切にしています。

例えば、良く出来たテストが返っ  
てきた時は、めちゃくちゃにほめ  
てあげます。そして「次も頑張っ  
てね。」と背中を押してあげるよう  
にしています。あまり良く出来な  
かった場合は「この問題でこれだ  
け出来たらすごいよ。」とまずほめ

てあげます。その後に、苦手なところ、出来なかったところを分析し、教えてあげます。それでも分からなければ、分かるまで一緒に考えます。

娘は、絵を描くことが好きです。毎日、描くほどです。最近は、描き方をインターネットで調べ、真似ながら練習しています。小さい頃から比べると、だいぶ上手になっています。少し前までは「上手に描けたよ。」と嬉しそうに見せてくれたのですが、近頃は恥ずかしいのか、見せてもらえていません。それでも、良く出来たものは「良く出来たと思うんだけど、どうかな。」と意見を求めてくるようになりました。その場合も、ほめてあげることは忘れません。何か修正したほうが良い場合は、教えてあげるようにしています。

小さい頃は、うまくいかないことがあると、すぐに怒ったり、イライラしたりしていましたが「ほめる」ようになってからは、少しずつ減ってきたように思います。「ほめられて育つ。」私自身も、

ほめられて育つタイプなので、娘も同じなんだなと思いい「ほめる」ことを多くするようになりました。ほめられることは、大人も子どもも嬉しいことです。間違ったこと、いけないことをした時以外は「ほめる」ことを優先し、娘の気持ちを少しでも前向きにしてあげられるようにしたいです。

「親が変われば、子どもも変わる」大人になった自分自身を変えることは、少し難しいことかもしれない。「私のようになってほしくない。」と思いつつも、なかなか思うようにいかないものです。それでも、私が変われば、娘も変わってくれと信じて、少しずつでも変化させる勇気をもちたいと思います。

これから中学生、高校生とどんどん大きくなっていくにつれ、思春期を経験し、会話をする機会が減っていくかもしれません。コミュニケーションをとるのが、難しくなるかもしれません。それでも、少しの会話のなかでも「ほめる」ことはやめないでいようと思いま

す。ほめられることの素晴らしさを、今のうちに沢山伝えて、前向きに育ってもらいたいです。



## 「娘と私」

青遙学園 那珂市立額田小学校 保護者

鈴木教彦

私の家族は、娘と妻の三人家族で、隣に祖父母とその飼犬がいます。

今回、「親が変われば、子どもも変わる」ということで、娘のこと家族のことについて考えてみました。その中で自分は、何も家族に対してできていないのではないかと気づかされました。

娘は、東日本大震災の起こる一か月ほど前に生まれました。私は仕事の関係で数か月ほど娘とは、ほとんど会うことができませんでした。久々に娘に会えた時は、娘の成長ぶりにビックリし大変な時期に子育てができず、妻には大変申し訳ないことをしてしまいました。

娘も今は、五年生になりました。ただいま、反抗期真っ最中です。特に、私に対して機嫌が悪い

と、無視をされてしまったり、話しかけに行っても「あっちに行つて!」「こっちに来ないでよ!」と相手にされずまったく話をしてくれなかったりすることもあります。どうやって、話してもらえるか、あの手この手と挑戦してみますが、なかなかうまくいきません。ある時に、物で釣ったりしてみました。これが失敗でした。その時は話をしてくれますがその時だけです。その後は、また話してもらえなくなります。妻からは、物で釣るなんて一時しのぎなことをしたって意味がないと怒られました。確かに一時しのぎのことはしても解決にはなりません。

どうすれば、うまくできるか日々悪戦苦闘している毎日なのですが、あることに関してだけは違います。それは、食えることに関してです。私と娘は、食えることが大好きです。この時だけは、一致団結しよく話します。私は、料理が趣味で休みの日に料理をします。その際に娘と何が食べたいかなど話をしコミュニケーションを取っています。

す。たまにですが、一緒に料理を作ったりもします。一緒に料理をすることにより、コミュニケーションも取れますし、物の名前を覚えられますし、何が危ないことなのか、段取りの仕方などいろいろな経験ができます。これは、大人になつてからも役立つことかなと思います。私の父は寿司屋をしていました。その父や母が仕事をしている姿を見て、いろいろなことを経験させてもらいました。今、その祖父に娘はお寿司を握ってもらい食べています。

なかなか、娘とは会話ができない問題もありますが、何か一つでもきっかけを作っていきたいと思っています。

また、私は今年度PTAの役員をさせていただいております。昨年度より新型コロナウイルスにより、生活環境などが大きく変わりました。私も環境が変わりストレスを抱えています。子どもたちは、それ以上にストレスを抱えていると思います。学校の行事もなかなかできない状況の中、何とか先生

方も子どもたちのためにいろいろな方法で対応していただいています。私たちもPTA役員として、協力していきます。

最後に、日々、娘の成長を見ていくとともに、私も一緒に成長していきたいと思っています。



## 「どんな時も寄り添って」

青逢学園 那珂市立第二中学校 保護者

山 田 真由美

私の家族は、夫と中学一年生の長女、小学一年生の次女の四大家族です。今日は、そんな私と娘たちとの日々の生活について、少しだけお話ししたいと思います。

私たち夫婦は共働きです。長女を授かり、四歳くらいまでの間は、私自身仕事で忙しく、子育てとのバランスを保つことがとても大変で、うまく両立していたとは、とても言える状態ではありませんでした。仕事七対子育て三。これだけを耳にすると、なんて酷い母親だと思いかもありません。けれど当時の私の頭の中は、朝から晩まで一日中、仕事の事ばかり。保育園の迎えもいつも時間ギリギリの一番最後。長女の寝顔を見ては、「ごめんね…」と、自分勝手な接し方に、自らを責め、自己嫌悪に陥っ

てしまう毎日でした。

それでも、仕事のスタイルを変え、仕事も出来ず、長女が三歳になり半年が過ぎた頃、保育園の先生から、少し話がしたいと言われ、「えっ!? なにっ?!?」と、不安がよぎりました。その担任の先生は、私も長女も大好きな保育士でとても信頼のおける人です。生後三か月から、いつも親身になって私の子育てに手を差し伸べ、いつも寄り添ってくれていました。私を真つすぐ見つめ真剣に話をしてくれたその時の先生の顔を今でも忘れません。「つーちゃんが、とても不安定です。お昼寝ができません。お腹も空いているはずなのに、ご飯も思うように進みません…。いつもニコニコのつーちゃんの笑顔が見られません。つーちゃんとの時間を少しでもいいんです! ちゃんと作ってください。お願いします!」先生の瞳には涙がいっぱいでした。どこかでわかっていた長女の不安定さ。でも、それを大丈夫と、大人の勝手な都合でそう思い込み、ちゃんと向き合おう

としていかなかった事への後悔と罪悪感で息ができなくなりました。そこで初めて立ち止まって、自身と向き合い、今一番に守らなければならぬ長女の為、出来る事は何かを考え、新しいステージで頑張っていくことを決めました。そして今があります。

人を変えることはできません。変えることができるのは自分だけ。しかしそれも、簡単なことではありません。けれど、自分なら変えられる可能性は必ずあります。自分が良い方向へ変わること、その影響は周りの人たちに対して変化を及ぼすかもしれません。それは一番身近な子どもたちにも言えることだと思っています。

私は誰かの手本になれるような人間ではありません。色々な事に迷い、不安になったりもします。子育てデビューをして十二年。母になり十二年が経つ普通の人間です。自分ひとりでは、変化を恐れ立ち止まるのができなかつたかもしれない。自分と向き合うことさえも逃げていたと思います。け

れど、私たちの周りには手を差しのべ、力を貸してくれる人が沢山います。そのことに日々感謝をし、自分もそうありたいと強く思い過ぎています。

どんな時も、子どもと向き合う大切さ。子どもの力を信じて見守る、私自身の強さ。嬉しくて涙する時も、悲しくて涙する時も、私の方が大泣きです。それも毎回。これからも、当たり前を大切に、当たり前前に感謝し、当たり前前の「大好き」を日々娘たちに伝えていきます。

今、長女の夢は、私と同じ仕事に就くこと。「大変だからやめて!」と、正直思う気持ちもありますが、幼い頃から私を見て、そんな風に、思い考えるようになった娘の成長が嬉しくて、胸がいっぱいになります。子どもは私の宝です。これから、子どもの笑顔と未来を守っていききたいと思っています。



# 「家庭の日」図画・作文発表会

## 並びに表彰式典

令和3年12月11日(土)  
於 市総合センターらぼーる

茨城県青少年育成協会は、明るく楽しい家庭づくり県民運動の環として推進している「家庭の日」を普及させるため、絵画・ポスターコンクールを実施しています。青少年育成那珂市市民会議では、この趣旨をさらに浸透させるため、コンクールに作文の部を加えると共

に、毎年、作品展示・作文発表会・表彰式典を実施しています。今年度は、市内の小中学校から図画601点、作文793点の応募がありました。紙面では、図画・作文とも金賞を受賞した作品のみ紹介させていただきます。



# おじいちゃんのとマト

わかすぎ学園那珂市立菅谷東小学校 一年

高嶋 博人 たかしま たくと

なつやすみに、ぼくはおかあさんとおねえちゃんといっしょに、トマトのしゅうかくのおてつだいをした。まいとしおじいちゃんがつくる、あまいちゅうだまトマトが、ぼくはたいすきだ。

ハウスにはいると、あかやみどりのトマトが、なんだかぶどうみたいだった。「くきのふしをてでひねると、かんたんにとれるよ。」

と、おじいちゃんがトマトのとりかたをおしえてくれた。ときどきへたがはずれてしまったけど、なれてくるときれいにとれるようになった。ハウスのなかはあつくて、ぼくはなんどかへやにもどつてやすんだ。そのあいだも、おじいちゃんは、のびたくきをひもでしばったり、わきめをきつたり、あおくてちいさいみをきりおとしたりしていた。まっかなトマトがかごいっぱいとして、ぼくは、はやくたべたいな、なにつかうのかなとおもった。

そのあと、ちよくはいじよにだすた

め、ふくろづめをした。おじいちゃんが、ひびわれやキズのあるトマトをとりぞいで、おねえちゃんが、ぬれぶきんでトマトをやさしくふいた。ぼくは、トマトを四〇〇グラムずつはかつてふくろにつめた。ぼくは、このさぎょうがいちばんのしかった。

そのひのおひる、ぼくのとったトマトはトマトパスタになった。われたトマトをあつめて、おかあさんがつくった。トマトがあまくて、とてもおいしかった。ぼくはなんかいもおかわりをした。

ぼくは、よくはたらいたとおもった。でも、おじいちゃんが「一〇〇パーセントがんばったしたら、ぼくは六四パーセントかな。だから、つぎは八〇パーセント、そのつぎは一〇〇パーセントになれるように、がんばりたい。」

# みんなであへるおひるごはん

ばち野学園那珂市立五台小学校 二年

岩崎 風花 いわさき ふうか

今日は田うえです。わたしは、この日をたのしみにしていました。あさ

からわくわくしていました。なぜかというところ、かぞくがみんなできよう力して、田うえをするからです。でも、本とうのたのしみは、あぜみちで、みんなでわいわいおひるごはんをたべることです。なん日も前から、今日という日をたのしみにまっています。

田んぼでは、まず、おじいちゃんが、レーキでどろをかきまぜます。つぎに、おとうさんが、とんぼでひょうめんをならします。そして、ひいおじいちゃんが、きかいでなえをうえます。わたしはというと、ザリガトリをしながら、みんなのようすを見ていました。

いよいよ一ばんのたのしみの、おひるごはんのじかんがやってきました。おひるごはんをとけるのはわたしのしごとなので、たのまれるのをたのしみにまっています。おとうさんが、「風がつよいからいえてたべようか。」と言ったので、とてもざんねんでした。すぐたのしみにしていたので、がっかりです。しぶしぶいえにかえっておちこんでいると、おばあちゃんとおかあさんが、

「おにわでたべよう。」

と言いました。そのときは、とても

うれしかったので、いそいで、テーブルや人数分のいすのじゅんぴをしました。みんながかえってきて、たのしくおしゃべりをしながら、ごはんをたべました。おすしや、うどんや、えだまめや、からあげや、くだものを、おなかいっぱいたべました。やっぱり、そとでみんなでたべるごはんが一番おいしいなと思いました。

あきになって、おいしいおこめができるのが、たのしみです。でも、わたしの本とうのたのしみは、いねかりのときにみんなでたべるおひるごはんです。

**おばあちゃんと大ふく作り**

白鳥学園那珂市立瓜連小学校 三年

櫻村 陽万莉

おぼんにみんなが集まった時、おばあちゃんが大ふくを作ってくれました。わたしのお兄ちゃんたちやいとこたちもいっしょに、みんなで作りました。わたしは、大ふくをはじめ作るのでわくわくしました。

さいしよは、おばあちゃんの実家で

作ったもち米を使って、大ふくのかわを作りました。水にひたしたもち米を、おもちを作るきかいに入れてむしました。そこにさとうを入れてまぜました。グイーングイーンと音を鳴らしながら、回したりこねたりして、すこしずつおもちみたいになってきました。

と中、とくべつに、味見させてもらいました。とってもあまくて、もちもちしておいしかったです。出来あがったおもちはずごくあつあつで、ビヨーンとのびました。

いよいよ大ふく作りです。「かたくくりこをつけるとおもちが手につかないよ。」

とおばあちゃんが教えてくれました。おもちをうすくのばして、丸い形を作ります。そこにあんこを入れてつみみます。四か所をおりたんで、中心を指でつまんで形を整えます。強くひっぱると、おもちがすぐにやぶけてしまったりあんこが出てしまったりして、むずかしかったです。みんな、服や顔がまっ白になりながらがんばって作ったので、六十こぐらい出来ました。

小さな大ふくや大きな大ふく、

ちよつとかつこう悪い形の大ふくもあつたけれど、みんなでがんばって作ったので、とってもおいしい大ふくが出来ました。

はじめて自分で作った大ふくは、とってもあまくて、かわがやわらかくて、さい高においしかったです。みんな口のまわりをまっ白にしながらむちゅうになつて食べました。夏の楽しい思い出になりました。また、みんなで大ふくを作りたいです。

**初めてがっつぱい**

わかすぎ学園那珂市立菅谷東小学校 四年

高嶋 瑞歩

「こんなに大ぜいでいねかりをしたのは初めてだよ。」

いねかりの後、おじいちゃんがまん足そうに言っていた。

わたしが毎日食べているごはんは、おじいちゃんが作ったお米だ。昨年秋、わたしは初めていねかりを家族で手伝った。その日、お父さんは初めていねかり機を使い方をおじいちゃんに教わった。お父さんと親せきの

おじさんがこうたいでいねをかり、その間におじいちゃんがおだを作った。おだは、竹を三本組んで三きやくを作り、それをかんかくあけて立てた。そこに長い竹をのせると、ものほしざおのようになった。竹で作った三きやくは、ぜつみょうなバランスで立っていた。そこに、わたしやお母さんがいねをかけていった。いねは重くて持ち上げるのが大変だった。弟はせがとどかないので、いねを運んでわたし

にくれた。いねをかりおわると、みんなでひたすらおだがけをした。いねが思ったよりいっぱいあったので、いづになつたら終わるのだらうと心配になった。でも、大ぜいでやったので思ったよりはやく終わった。いねのたばが一つのこらずおだにかけられた時、みんなで協力して働いたという達成感がありとてもうれしかった。今まで、おじいちゃんと親せきのおじさんだけで大変だったんだなと思った。

二週間後、新米ができた。ごはんがたけてすいはんきをあげると、ごはんがびかびかかやいて、食べるとあまく感じた。こんなにおいしいと思ったのは初めてだった。きっと、みんながいねかりをがんばったからだ。

おじいちゃんは毎年お米を作つてくれているので、大切に食べようと思つた。そして、これからは毎年、家族でいねかりを手伝うことにした。

### 笑顔いっぱい魚釣つ

ばら野学園 那珂市立菅谷西小学校 五年

浅見 紗那

家族で港に釣りに行きました。港は魚くさく、魚も海の底も見えない暗い海の色です。ここでどんな魚が釣れるのかなと思いました。

まずは釣りの準備です。さおは私の身長よりも長く、先は折れそうなくらい細いです。リールは大きな魚が食いついても負けないくらい丈夫そうです。細く透明な糸に、おきあみというえさを入れる小さなかごと、その上へえびの形のワームと釣り針がついています。

準備はした、いよいよ釣りの始まりです。教わりながら釣り糸を海に落とします。海の底につくまで糸がどんだんのびていきます。のびるのが止まると、底についた合図です。リール

を少しまき、さおを上下にふつて止めるのをくり返して魚が来るのを待ちます。

最初に釣つたのはお父さん。小さなフグです。私と妹はかわいくて大よろこびでしたが、食べられない魚なので海に放してあげました。それから何度かえさを入れたり、さおを下にふりますがなかなか釣れません。その間にお父さんとお母さんはアジを釣り、妹もフグを釣りよるこんでいます。

私だけ釣れずくやくなつたその時です、何かが糸にさわった気がしました。ドキツとして、心ぞうがドクドクしているの感じました。急いでリールをまき、おそるおそる糸の先を見ると、アジでもないフグでもない、茶色くて小さな魚がついています。「何これ。」とお父さんに見せると「ハゼー」とおどろいています。私は「やったー」と声をあげました。家族みんなが笑顔です。途中で私だけ釣れなくてくやくなつたけれど、最後はだれも釣つていない種類の魚を釣ることができて、私は得意気な気持ちになりました。

釣つた魚は身がホクホクでとても美

味しかったです。今度は私が一番最初に、一番大きくて、一番美味しい魚を家族の笑顔のために釣りたいです。

### 登山を通して思ったこと

ばら野学園 那珂市立菅谷西小学校 六年

鴨下 桂

私の家では、よく登山に行く。理由は、父のしゅ味が登山なのだ。だから、私と兄はよく父から登山にさわられることが多い。

あまりよく覚えていないが、私と兄は小さいころから山に登ってきたらしい。特に私は、つかれたら父におんぶしてもらって山の頂上を目指したと母は言っていた。そのおかげか私は、海よりも山の方が好きだ。母や兄も山の方が好きだと言っていた。

それに、登山をしていると、それぞれの季節にちなんだ花や木などの植物が見られる。私が知らない植物を見つけると、父は何の植物なのかを教えてください。だから、家に帰った時は登山をする前の自分より物知

りなっている気がする。それも私が山好きな理由の一つだと思う。山に登るのはとてもつかれるけれど、頂上の景色は私のつかれをふき飛ばしてくれようだ。だから、山を下りるときもがんばろうという気持ちになる。

以前はよく、私と父といっしょに山に登っていた兄は中学生になり、部活動や中学校の宿題で小学校のときよりも山に行く回数が減った。そのかわりに、母が以前より登山に行く回数が増えた。不思議に思っ母にたずねると、

「二人だけだとお父さんがさみしがるからね。」とのことだった。去年の秋、兄も参加し一年ぶりに四人で近くの山に登った。この時は、父よりも母の方がうれしそうだった。兄が、部活動や中学校の宿題で毎日のそがしいのは分かるけど、また時には、家族全員で山に登りたいと思っている。

小さいころにおんぶされてばかりだった私も今では自分だけの力で山に登れるようになった。でも、ここまですてきたのはもちろん自分だけの力ではない。家族や自然にも力をもらっ

た。これからも、感謝や思いやりの気持ちと共に、登っていけたらと思う。

## 私のおやつ試合

ばら野学園那珂市立第二中学校 八年

とみた 富田  
はんすい 万翠

中学二年の夏休み。「中二病」という言葉があるように、人生の青春真っ盛りの夏休みなのに不要不急の外出はできず、剣道部の練習以外どこにも行けない夏休みである。よって私は、暇を持て余していた。夏休みに入り三週間が経ち、特に何をやるわけでも無く、読書感想文の課題図書とにらめっこしていた。

そんなある日、父がとある本を買ってきた。その名も「もつとー魔法のてぬきおやつ」おやつのレストランだ。確かに私には、七年前（小学一年生）におやつ作りのブームが到来していた。しかし、年々そのブームは薄れ、三年くらい前に、完全に去って行った。

でも、暇という事もあり、「てぬきおやつ」というフレーズにひかれ、「トー

スターで簡単！焼きプリン」を作ることにした。幸いにも、材料は完璧に揃っていた。

牛乳と砂糖を混ぜ電子レンジにかける、卵を割りほぐす、全てレシピ通りに工程をこなす。そして、オーブントースターへ。出来上がったプリンを食べみると「うーん。固まっているところもあるぞ。」兄たちは、「うまいよ。」と言ってくれたが、自分としては納得できない味であった。母に聞いてみたところ、オーブントースターはサーモスタットが働いて焼いている途中で熱が切れてしまうとということが分かった。「そうだー俺には時間がいつばいあるんだ！」素直に時間をかけてオーブンで作ることにした。ついでにカラメルソースの作り方も調べてグレートアップさせた。カラメルソースを作っていたら、兄が「煙が出るから換気扇をつけろ。」とアドバイスをくれた。カラメルを流したプリン型に、生地を流し込み、バットに並べ、百六十度に予熱したオーブンに入れ三十分程湯煎焼きした。プリンを焼いていると祖母が鼻をくんくんさせながら「甘い匂いだね、何作ってるの?」と台所にやってきた。出来上がっ

たプリンを冷やして翌日食べてみる。「うまいーこれだよ。俺が食べたかったプリンは！」嬉しさで自然と顔がほころぶ。みんなに食べてもらいたい。兄に自信を持って勧める。心の中は期待と不安で一杯だ。「すごい進歩だな。」と、褒めてくれた。高校から帰ってきたもう一人の兄が「プリン食べてもいい！」と聞いてきた。作ったプリンは四つ。祖母にも食べて貰いたいし、父や母にも食べて貰いたから、「いいよ。」と言いながら、「次は六つ作ろう。」と心の中で決めていた。

おやつを作り始めてから一週間が経ち、気が付けば、おやつを通して家族との会話が増えた。美味しいと言われると嬉しくなってしまう自分を「単純だな」と自嘲する一方、「次は、何を作ろうか。」とページをめくる自分もいる。ある日、チーズケーキの材料を混ぜていたら母に「お父さんの作戦勝ちだね。」と笑われた。そういえば、父の好物はチーズケーキ！見事に面一本取られた気分だった。

「家庭の日」 図画作品  
コンクール  
金賞受賞作品



みんなでしゃぼんだま  
わかすぎ学園 那珂市立菅谷小学校1年  
いしかわ るき  
石川 琉輝



わらびもちを作ったよ  
青造学園 那珂市立横堀小学校2年 塚 佑芽子



わがやのオリンピック  
わかすぎ学園 那珂市立菅谷小学校3年 二階堂 大智



自分で作った流しそうめん  
青造学園 那珂市立横堀小学校4年 塚 祐希人



おうちでコンサート  
緑桜学園 那珂市立芳野小学校5年  
長山 侑燈



新しい家族  
わかすぎ学園 那珂市立菅谷東小学校6年 葉山 裕心



おじいちゃんに挑戦  
わかすぎ学園 那珂市立第四中学校8年 関根 葵

「家庭の日」 図画・作文入賞者 (金賞・銀賞・銅賞)

学年	図画の部			作文の部		
	金賞	銀賞	銅賞	金賞	銀賞	銅賞
小1	いしかわ るき 石川 琉輝	まつい はるこ 松井 晴子	なかじま るか 中島 瑠風	たかしま はくと 高嶋 博人	ささじま こゆり 笹嶋 こゆり	おおひら あきと 大平 瑛人
小2	あくつ ゆめこ 塚 佑芽子	うんの おうしろう 野野 桜志朗	とくなが みさ 徳永 美沙	いわさき ふるか 岩崎 風花	みやた かさね 宮田 かさね	すずき みお 鈴木 実桜
小3	にかいどう だいち 二階堂 大智	かしむら ひまり 榎村 陽万莉	たかはし あゆみ 高橋 歩未	かしむら ひまり 榎村 陽万莉	にかいどう だいち 二階堂 大智	おだくら しょうたろう 小田倉 尚太郎
小4	あくつ ゆめこ 塚 祐希人	しどみ やまと 都 大和	ふじさく もも 藤咲 もも	たかしま みずほ 高嶋 瑞歩	おおもり あや 大森 彩	たかはた みく 高島 心玖
小5	ながやま ゆうひ 長山 侑燈	ハイブズ ケヴィン ケヴィン 宙	おおたけ はるか 大竹 はるか	あさみ さな 浅見 紗那	くわいじま かいと 桑島 快都	なかじま あやか 中嶋 彩夏
小6	はやま ゆうしん 葉山 裕心	くにひろ まなみ 國廣 愛美	くまた ここね 熊田 ここね	かもした かつら 鴨下 桂	おだくら しょうたろう 小田倉 稜	おおくぼ あいり 大久保 愛璃
中学	せきね あおい 関根 葵	マリナオ レクス	かもしだ ゆめ 鴨志田 結芽	とみた ばんすい 富田 万翠	わたひき まゆ 綿引 真由	ただ れんのすけ 多田 漣之介

令和3年度 那珂市「善行青少年表彰」 受賞者

氏名	学校・学年	善行の概要	備考
おかわだ ひまり 岡和田 陽理	緑桜学園那珂市立第三中学校第8学年	入学してから現在に至るまで、通学路に落ちているゴミを拾いながら登下校することを継続している。地域のかたからも感動の電話を複数回いただいている。	公共生活への貢献
おがさわら はるな 小笠原 治貴	緑桜学園那珂市立第三中学校第9学年	下校途中に自宅付近で迷子になっている幼児を発見し保護する。話しかけ自宅を見つけようとしたが、分からなかったので学校に電話をし、駆けつけた教員と一緒に自宅を探したが発見できなかった。その後、那珂警察署へ引き渡し、事なきを得た。	事故防止
なかじま えりな 嶋里奈 やまざき りん 山崎 莉音 との外 おか り理 さ沙	わかすぎ学園那珂市立第四中学校第8学年	下校途中に自転車のチェーンの隙間に荷網がからまり動けなくて困っている生徒に声をかけ、直そうと試みた。自分たちでは直せなかったので、学校まで戻り教員を呼び自転車を修理した。その時もライトを照らし、生徒に声をかけ励ましながらかかり添った。	個人生活の徳行

あいさつをしましょう「いってまいります」「いってらっしゃい」

**今、学校では**

**青遙学園 那珂市立 第二中学校**

題字 七年 住谷 麻唯子

コロナ乗り越え、大成功の※青遙祭

それぞれ学びと成長

青遙祭の朝、僕はあまりドキドキしていませんでした。なぜなら、これまでの練習を経て、自信がついていたからです。

僕はもともと、練習は実力を上げるため、団結力を高めるために必要なのだと思っていました。しかし、今回の青遙祭の練習で、もう一つの練習の必要性について気づかされました。それは、練習は人として成長するために必要だということです。練習を続けること、本気でやることで僕は人として大きく成長することができたと思います。それが、本番の自信につながったと感じました。

結果、九年二組は金賞をとることができました。みんなが練習の大切さを意識し、その気持ちを保ち、自信をもって自分たちの合唱をすることができたからだだと思います。コロナ禍の中での青遙祭でしたが、短い期間で集中して

取り組み、よい思い出を作ることができたと思います。

合唱をとおして私はたくさんの方を学びました。仲間と高め合った歌声の素晴らしさ、一生懸命歌う楽しさ。そして、指摘を受け入れる心。

最初は合唱とは言えない歌でした。だから、朝練、昼練、放課後練と毎日たくさん練習しました。時には注意することでクラスがよくない雰囲気になつてしまうこともありましたが、し、よりよい合唱にするために、お互いの注意を受け入れ練習を続けました。その結果、本番は目一杯の力を振り絞って歌うことができました。練習中何回も曲を聞いてくれた先生も、本番ではみんなで書いたメッセージボードを私たちに見えるように後ろで持つて元気づけてくれました。



銀賞という結果だったけれど、九年一組が団結できた合唱が披露できたと思います。朝や昼などの短い時間を有効に使って練習した経験、これからの受験勉強に生かしていきたいです。

※青遙祭：第二中学校の文化祭

**まちづくり委員会**

住んでよかった地域づくり

芳野地区まちづくり委員会

委員長 檜山 公明

芳野地区まちづくり委員会は、ふれあいセンターよしのの一角に事務所があります。

委員会は、飯田・鴻巣・戸崎地区の自治会で構成されており、地区内に於いても少子高齢化が進むなかで、地域が一体となり安心、安全に暮らせる活力ある地域づくりを目指し、各種の事業を展開しております。

二年続けてのコロナ禍のなか、感染拡大防止の観点から多くの計画していた事業が中止を余議なくされているのが現状です。そのような中でも、戸崎踊り会メンバーが各地区の敬老会・老人ホーム・お祭りなどで披露している、大笑い七風神音頭などの演目を、芳野地区の郷土芸能として後世に伝承するために、市の市民活動支援事業を活用して「令和踊りの会」を発足し、昨年度から踊り手を募集して練習を重ねているところです。

これらの事業をとおし、各種のイベントで披露し活力ある地域づくりの起爆剤になればと考えております。また、子どもたちは、将来地域を担う後継者として、地域全体で支え、育てる必要性があり、三地区にはそれぞれ子どもを守るう会が組織され、特に通学時

に事件・事故に巻き込まれることのないように、日々活動し大きな成果を上げています。

なお一層の組織の充実を図るために、委員会が中心となり芳野地区子どもを守るう会合同協議会を設立し、警察・学校・市役所などの関係機関の方々の出席をいただき懇談会を開催し問題意識を共有することにより、子どもたちを守つていきたいと考えております。

今後、地域のニーズが多様化、複雑化するなか事業内容を精査し運営に努めてまいります。



**編集後記**

未曾有の感染症禍で年が明けました。新規感染者が増えるなかでも時の流れは待つてはくれず、特に、青少年は卒業、入学、就職等自分の生活を作り上げていく季節となりました。

作家吉川英治は  
菊作り菊見るときは陰の人  
菊根分けあとは自分の土で咲け  
と詠んでいます。

様々な制限を強いられるなか、親子を育て、その行き先を見守つていく、毎日を大切に過ごしていきたいものです。

広報部会長 袴塚 耕二